

樺太敷香の写真家・半澤中の生涯と作品リスト

宇仁 義和

009-4113 北海道斜里郡斜里町本町49番地 斜里町立知床博物館

はじめに

半澤中（はんざわ ちゅう、1893～1942年（明治26～昭和17））。以下半澤と記す）は斜里町に生まれ、1925年（大正14）樺太に渡り、敷香町で写真館を開業した。半澤は、写真をとおして樺太北部の自然や産業、ウイルタやニブフなどサハリンの先住民族の生活を積極的に紹介した。これらの作品は、みやげ用の写真や絵はがきとして販売され、現在まで先住民族の生活記録を伝える資料として出版物などに繰り返し使用されている。

ところが、半澤の作品は、無記名のまま博物館に展示されたり、報告書や写真集に掲載されることが多かった。そのため撮影者が知られないまま使用が続けられる作品が多く、しかも個々の写真については、撮影場所や年代、被写体などに関する撮影データが整理されていない状態にある。

そこで、既存の出版物や絵はがき、販売写真から半澤の作品リストを作成し、個々の作品については、資料調査と聞き取りから撮影データの付加を試みた。加えて、その過程で得られた情報から、作品の所蔵先と収録出版物のリスト、半澤のライフストーリーの概略を作成した。

本研究を進めるにあたり、長男の半澤玲一氏には数多くの証言や資料の提供をいただいた。また妻の半澤テル氏をはじめ、次の各氏・機関からも協力を得た。記してお礼申し上げる。池上二良、内田祐一、大塚陽子、小泉 昇、金喜多一、潤渕洋子、網走市立郷土博物館、市立函館博物館、余市町図書館、稚内市立図書館、北海道立北方民族博物館、北海道立図書館、北海道大学附属図書館北方資料室（順不同・敬称略）

なお、本研究は平成10年度文部省科学研究費補助金（奨励研究（B））課題番号10904001の助成を受け行われた。

方法

1. 作品リストの作成

作業は、まず作品の同定から行った。半澤の作品とは、半澤自身または半澤写真館によって撮影されたもので、（1）半澤写真館発行と印刷された絵はがきまたはそう印刷された袋に入った絵はがき、（2）写真館のスタンプが押された販売写真（写真1）、（3）半澤の記名入りで書籍に収録された写真、（4）半澤より親族に送られた親族所蔵写真、（5）当館所蔵の組写真（写真2）とした。なお（5）は、サハリンの風景と先住民族の生活記録からなる1から40までの通し番号が付けられた組写真で37枚が現存し、内容から半澤の作品とした。作品リストには根拠の区分を明記した。

根拠に欠けるが半澤玲一氏（1928年（昭和3）生まれ、以下玲一氏）、半澤テル氏（1905年（明治38）生まれ、以下テル氏）などの証言や出版物への掲載状況から、半澤の作品であると考えられたものは「推定」として作品リストに加えた。リストには、1）初出年代、2）撮影場所、3）被写体の説明、4）原題の撮影データを付加した。このうち、既存の文献や出版物から引用したものについては出典を明記し、玲一氏やテル氏、1932～47年（昭和7～22）に敷香町役場に勤務

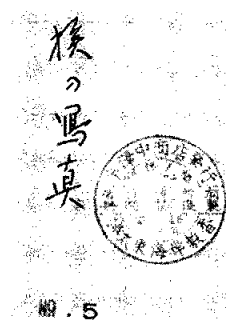


写真1. 販売写真の裏面スタンプ



写真2. 斜里町立知床博物館所蔵組写真

していた金喜多一氏（1910年（明治43）生まれ）らの証言を用いた場合はその旨を明記した。1）初出年代

現在残されている作品からは直接撮影年代を知ることができないため、作品が掲載された出版物の初出年代を利用した。既存の出版物や関連資料から撮影年代の記述が得られた作品については、3）の「説明」に書き加えた。

2）撮影場所

撮影場所については、組写真や絵はがきのタイトルに明記されている場合は、その地点とした。なお、一作品から複数の撮影場所が推定された場合は、併記した。

3）被写体の説明

図版として収録された出版物の解説文や聞き取りによる情報を説明とした。また、出版物や聞き取り証言から得られた説明、筆者自身が作品から読みとった情報を加えた。複数の説明が得られた場合は、併記した。

なお、被写体の個人名についての情報も得られたが、一部を除きリストには記載しなかった。

4）原題

当館所蔵の組写真のタイトル、または半澤が発行した絵はがきの説明文を原題とした。

2. 作品の所蔵先と収録出版物

半澤の作品のうち、根拠の区分の（1）にあたる絵はがき、及び（2）の販売写真の所蔵先のリストを作成した。

結果と考察

1. 作品リストの作成

調査の結果、根拠を持ち半澤の作品として判断されたもの89点が得られた。作品の根拠の区分は、当館所蔵の組写真51点、スタンプが押された販売写真27点、絵はがき29点、親族所蔵写真3点であった。なおスタンプは2種類が見つり根拠が複数得られた作品があった。

作品の内容の内訳は、樺太アイヌ2点、ウイルタ22点、ニブフ10点、ウイルタまたはニブフ12点、その他の先住民族4点、トナカイ9点、産業と敷香市街14点、海豹島7点、風景その他9点であり、ウイルタを被写体にしたものが多かった。

作品リストには、半澤ものと推定された写真26点を加え、115点の作品を収録した。なお考察は根拠のある作品についてのみ行った。

1）初出年代

初出年代が得られた作品は、1927年が2点、1930年8点となり、本文の記述から『樺太奥地案内の栞』（敷香郷土研究会1930）の説明用の写真と考えられる当館所蔵の組写真が初出となる作品20点を加えた30点が、1927～30年の間に撮影されたものと考えられた。これは根拠の得られた作品の約3分の1にあたる。

2）撮影場所

作品の原題に記載された撮影場所は、敷香（市街）、幌内川、多来加、振戸山麓、オタス、国境標点第一号、半田、海豹島、中幌内川、東樺漁業株式会社の10カ所であった。出版物の記載、余市町図書館「市川文庫」所蔵写真のただし書きなどから得られた撮影場所は、上敷香、中敷香、敷香川、グリー、気屯、萩屋、多来加湾北岸、東多来加、留久志、第三天測点の10カ所であった。

3）被写体の説明

作品リストに記載した。複数の情報が得られた場合は併記した。

4）原題

原題は、65作品について得られた。絵はがき集「敷香風景第壹輯」の原題は、当館所蔵の組写真のものと同一であることから、この絵はがき集は1930年頃の発行と推定された。

販売写真の裏面に押されたスタンプの番号は、27個が得られ、最小番号は5、最大は99であった。同一の作品に異なった番号が記されたものはなく、一部の番号は当館所蔵の組写真の番号と共通していた。玲一氏の記憶では販売写真は約100点ということではほぼ一致しており、一連の番号は、通し番号を用いた半澤自身の作品整理番号と考えられた。

2. 作品の所蔵先と収録出版物

半澤の作品として判断された作品のうち、スタンプが押された販売写真及び袋入り絵はがきの所蔵先は、個人所蔵を除き7機関が得られた（表1）。

半澤の作品を収録した出版物は単行本や図録で35タイトル、雑誌記事4タイトル、合計39タイトルが得られた（表2）。ただし、撮影者として

表1. 半澤中の作品の所蔵機関

機 関 名	内 容
北海道大学付属図書館北方資料室	写真17枚（1932年「樺太旅行記念アルバム」）、絵はがき13枚
北海道立北方民族博物館	写真5枚
北海道立図書館	絵はがき29枚
斜里町立知床博物館	組写真37枚、絵はがき37枚
市立函館博物館	写真1枚（スタンプのない写真他あり）
稚内市立図書館	写真8枚、絵はがき10枚
余市町図書館「市川文庫」	写真4枚（スタンプのない写真多数あり）

表2. 半澤中の作品を掲載した出版物

著 者 又 は 編 者	発 行 年	タ イ ト ル	記 名
糸乗雷禪	1927	樺太案内旅行記	なし
改造社	1930	日本地理大系第10巻北海道・樺太編	なし
新光社	1930	日本地理風俗大系第14巻北海道・樺太編	なし
敷香町役場	1931	敷香町政要覧	なし
樺太拓殖新聞社	1931	始政式拾五週年記念 樺太写真帖	なし
若泉小太郎	1931	樺太紀行 北緯五十度の旅	なし
安東写真館	1932	樺太敷香写真帳	なし
カギヤ書店	1932	樺太敷香写真帳	なし
澤田雄三	1933	樺北の神秘境－海豹島へ、『旅』10巻8号	なし
竹内白鷺	1933	樺太を語る（二）、『旅』10巻4号	なし
樺太敷香時報社	1933	樺太年鑑昭和8年版	なし
澤田雄三	1934	樺太土人の昨今（2）、『旅』11巻3号	なし
敷香土人事務所	1935	オロッコ其の他土人の研究（半澤中商店発行）	なし
大野東雲	1935	樺太地誌（1977国書刊行会から再発行）	なし
樺太庁	1936	樺太庁施策三十年史	なし
樺太庁	1936	樺太写真帖	なし
阿部悦郎	1936	樺太の旅	なし
庄司 宏	1937	民族最後の人々 オタスの土人	なし
世良伊八	1937	樺太郷土写真帳（改訂版） （1959年国書刊行会『樺太写真帳』として再発行）	なし
川村秀弥	1937	先住民オロッコ・ギリヤークの生活と風俗『樺太庁報第6号』	なし
樺太庁敷香支庁	1938	管内要覧	なし
敷香支庁内土人事務所	1939	土人のしらべ	なし
樺太文化振興会	1941	樺太庁博物館案内	なし
西鶴定嘉	1942	樺太アイヌ	あり
山本祐弘	1942	犬橿と馴鹿橿、『旅』19巻2号	なし
山本祐弘	1943	樺太原始民族の生活	あり
玉貫光一	1944	樺太博物誌（1977年国書刊行会から再発行）	なし
山本祐弘	1970	樺太アイヌ－住居と民具	なし
北海道開拓記念館	1975	第4回特別展北方民族展資料目録	なし
国書刊行会	1977	写真集 樺太	なし
田中了、D・ゲンダヌ	1978	ゲンダヌーある北方少数民族のドラマ	なし
望郷樺太編纂委員会	1979	写真集 望郷 樺太	なし
間潟久治	1981	ウイльта語辞典	なし
池上二郎	1982	ウイльтаの暮らしと民具	あり
(財)白老民族文化伝承保存財団	1987	ソビエト連邦極東少数民族展	なし
田中了	1993	サハリン北緯50度線－続・ゲンダヌ	なし
田中了	1994	母と子でみる20 戦争と北方少数民族	なし
北海道立北方民族博物館	1997	第12回特別展「樺太1905-45－日本領時代の少数民族」	なし
Вишневский, Николай	1994	ОТАСУ	なし

半澤の名前を明記しているのは3タイトルであった。絵はがきで使用された例は、豊原の北進堂、函館ているのは2タイトルであった。絵はがきで使用された例は、豊原の北進堂、函館の小島大盛堂、敷香町役場などがあった。

また、サハリン州立博物館にはプリントが展示されている（リスト番号2、13、23、42、45）。

半澤中のライフヒストリー

玲一氏の証言を基本資料とし、文献の裏付けを加えて作成した。裏付け資料が得られなかった場合は、伝聞形等の記述をとった。写真は玲一氏の提供である。



写真3. 半澤中、斜里・外山写真館撮影

1. 樺太行前： 明治26年～大正14年 (1893～1925年)

半澤中(写真3)は明治26年(1893)11月16日、紋別郡各村戸長を務めた半澤真吉(北海道庁1912)の三男として斜里に生まれた。半澤の学歴、職歴とも詳細は不明だが、明治42年(1907)に斜里の代用教員を依願退職している(斜里外四ヶ村戸長役場「大正四年三月迄辞令簿」)。その後、東京に移るが関東大震災で罹災し、斜里に戻ることになった。そして斜里のテル氏と結婚し、斜里に新居を構えた。

半澤は東京在住時に写真を学んだらしいが、詳しいことはわからない。斜里では仲間の写真を撮影し、好評を得ていたという。斜里では現役場近くに写真館を開いたが、その記録は見つかっていない。なお、斜里時代のフィルムは敷香で戦災に遭い現存しない。

大正14年(1925)頃、彼は単身樺太に渡り、翌年、テル氏を呼び寄せ敷香での新生活を始めた。

2. 旧店舗時代：大正15年～昭和6年(1926～1931)



写真4. 半澤菓子店、右端が半澤、中央は妻テル

半澤の樺太での最初の仕事は、船舶のバッテリーの充電などだったらしい。そして大正15年(1928)頃、実質的にテル氏が経営する半澤菓子店(写真4)の店舗の裏側に1.5～2間ほどの撮影現像施設を作る。設備は簡単なもので、引伸しの光源には北向きの窓から入る自然光を利用したものだったらしい。カメラはガラス乾板を使用するキャビネ版の組立暗箱を使っていた。

なお住所は敷香村本通り南1丁目というが、樺太敷香港という標記もされている(敷香郷土研究会1930)。

半澤は、大正末から昭和初期に、風景や先住民族の生活の撮影を始めた。そして昭和5年頃までに撮影された写真が、作品の中核を占めることになった。それはこの時期に撮影された作品は、サハリン先住民族のオタス以外での暮らしを記録したものであり、また、トナカイによる物資輸送など樺太北部の風土をとらえた写真を数多く含むからである。

昭和3年(1928)の新聞連載記事「樺太を探ねてー潤潟教授のオロツコ研究」(北大北方資料室蔵)には文章の内容に合致した半澤の作品が用いられている。テル氏によると、半澤はオタスでの潤潟の調査に同行し、ウイльта語やニブフ語の会話もできたという。

昭和5年(1930)、半澤は『樺太奥地見学の栞』と、おそらくその説明用の組写真を発行した。翌年発行された『敷香町政要覧』は、半澤の作品が13点ほど使われ、全ページの3分の1を使った自然と産業、そして先住民族に関する解説の補助として用いられた。

半澤の多岐にわたる活動にも関わらず、写真の



写真5. 半澤写真館新店舗、右端が半澤

仕事は、機材費や見本の送料などに出費が多く、テル氏の印象は家計を苦しめるものだった。

3. 新店舗時代： 昭和7～16年 (1932～1941)

半澤写真館の新店舗は、公会堂の向かいに建築された(写真5)。住所は、敷香町山手

通り南1丁目。新店舗への移転時期は、昭和5～6年(1930-31)らしい。旧店舗時代は、半澤は撮影から暗室作業までを一人で行っていたが、新店舗になってからは4人程度の助手がいたらしい。

半澤が新店舗を構えた時期は、営林署や町役場、支庁など役所から仕事が増加した時期とだった。昭和6年発行の『敷香町政要覧』、同11年発行の『樺太庁施政三十年史』、敷香支庁の『管内要覧』(同13年)など関係官庁発行の書籍に半澤の作品が数多く使用されている。半澤は昭和5～10年の間に、写真家としての地位を築いたといえるだろう。

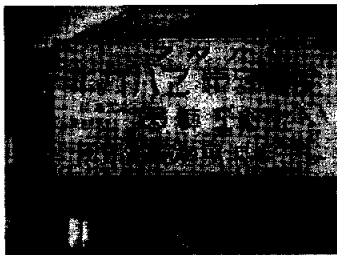


写真6. 半澤写真館オタス出張所の看板



写真7. オタス出張所で撮影された観光記念写真(左端はトナカイ飼育係のウイルタ)

また、警察の仕事も担当し、昭和13年(1938)岡田嘉子・杉本良吉の日ソ国境越境事件の際は、山形屋旅館の現場写真を担当したという。

4. 「オタスの杜」と半澤写真館

半澤は、敷香市街地の繁華街にあった敷香会館の隣にギンザ支店、幌内川対岸にオタス出張所(写真6)を出店する。どちらも出店時期は、テル氏の記憶では昭和9年(1934)頃といい、昭和14年の書籍の広告が残されている(敷香支庁内土人事務所1939)。テル氏によると、出張所の設置は、樺太庁の依頼によるかもしれないという。

オタス出張所での売り物は、飼育していたトナカイと並んでの観光記念写真の撮影であった(写真7)。トナカイの飼育はオタス在住のウイルタに行かせていた。また、出張所には菓子や飲物に並んで、先住民の工芸品が販売されていた(半澤玲一『オタスの杜』)。玲一氏の記憶では、出張所はオタスでの唯一の工芸品販売店であり、敷香土人教育所では展示がされていただけという。

なお、玲一氏が自己の記憶をもとにオタスの見取り図を作成されたので掲載する(図1)。

5. 帰国：昭和16～17年(1941～1942年)

半澤は昭和16年(1941)、撮影機材や撮影済みのフィルム、家財道具などを敷香に残して病氣療養のため家族を連れ千葉県館山市に転居した。写真館は、スタジオ写真のみの営業として本店と

オタスの地図(昭和16年頃)

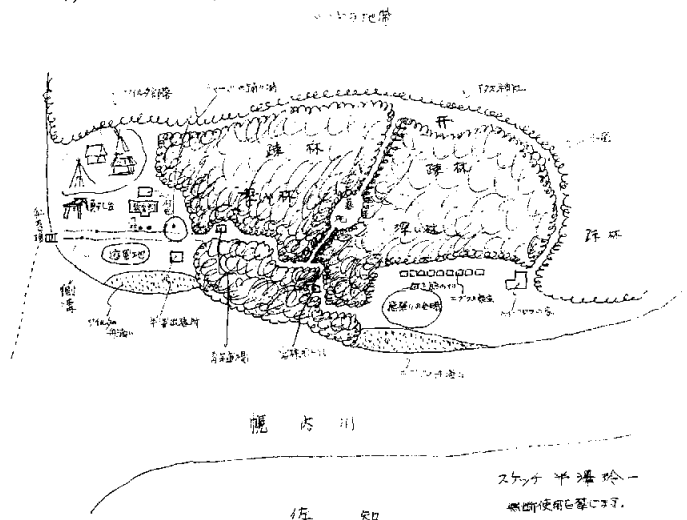


図1. オタス見取り図(半澤玲一氏作図)

支店を継続、オタス出張所は閉鎖されたい。その後、出張所は、軍の演習場ができることから取り壊しになったという。一方、半澤は症状悪化により昭和17年（1942）2月28日に死没した。

昭和20年8月20日、ソ連軍の空襲とともに、敷香市街に大規模な火災が発生（樺太終戦史刊行会1973）、半澤写真館は全焼した。そのため当時のフィルムやノート類、書類などもすべて焼失した。店舗を管理していた三輪支配人によると、焼け跡には大量のガラス乾板が溶け出し、山のようになっていたという。

引用文献

池上二良，1982：ウイлтаの暮らしと民具
今井半次郎，1930：樺太、日本地理風俗大系第14巻北海道及樺太
糸乗雷禪，1927：樺太案内旅行記
大野東雲，1935：樺太地誌（国書刊行会1977年再発行版を用いた）
改造社，1930：日本地理大系第10巻北海道・樺太編
金田一京介，1930：樺太・北海道の人種，日本地理大系第10巻北海道・樺太編
樺太終戦史刊行会，1973：樺太終戦史

樺太庁敷香支庁，1938：管内要覧
樺太庁敷香中学校・樺太公立敷香高等女学校同窓会、
1989：創立50周年記念同窓会誌第28輯「凍土」
敷香郷土研究会，1930：樺太奥地案内の葉
敷香支庁内土人事務所，1939：土人のしらべ
敷香時報社，1933：樺太年鑑昭和8年版
敷香町役場，1931：敷香町政要覧
敷香土人事務所，1935：オロツコ其の他土人の研究
新光社，1930：日本地理風俗大系第14巻北海道・樺太編
末永雅雄・伊東信雄，1979：挂甲の系譜
世良伊八，1937：樺太郷土写真帳（改訂版）（国書刊行会1959年再発行版を用いた）
徳田貞一，1930：樺太の自然と人文（写真解説），日本地理大系第10巻北海道・樺太編
西鶴定嘉，1942：樺太アイヌ
半澤玲一，n.d.：オタスの杜（私家版）
北海道敷香会，1997：嗚呼敷香
北海道庁，1912：半澤真吉，殖民公報第68号
間潟久治，1930：北海道・樺太の人種（写真解説），日本地理大系第10巻北海道・樺太編
間潟久治，1981：ウイлта語辞典
山本祐弘，1943：樺太原始民族の生活

HANZAWA, Chu: Photographer in the former Japanese territory of Sakhalin – his biography and a compilation of his work

UNI, Yoshikazu

Shiretoko Museum: 49 Hon-machi, Shari, Hokkaido, JAPAN 099-4113

HANZAWA, Chu (1893-1942) was a photographer in the northernmost region of the former Japanese territory of Sakhalin, which had been called Karafuto before the Second World War. His photo studio was in Shisuka, the Japanese name for Pronysk, and he also had a branch shop in the designate settlement “Otasu”. This research has produced the first compilation of Hanzawa's work. 115 photographs are included; 89 of which are proven to be his or his studio's work, and another 26 which are presumed to be so. The pictures which have been definitely proven to be taken by Hanzawa include 2 of Ainu; 22 of Uilta; 10 of Nivkh; 12 of either of Uilta or Nivkh; 4 of another natives; 9 of reindeer use; 14 of industry and Shisuka-town; 7 of Turreny Island; and 9 photographs of landscape or other. Some of his pictures were sold as prints and postcards as souvenirs for Japanese tourists; some were printed in at least 39 books published by the local government or private publishers; and some photographs have been exhibited in museums such as the Sakhalin Museum.

作品リスト

凡例：No.：作品リストでの整理番号、区分：根拠区分（U：知床博物館所蔵の組写真、S：スタンプ入り販売写真、P：絵はがき、B：書籍図版の記名、R：親族所蔵写真、A：推定）、撮影場所、説明：出版物の引用及び聞き取りによるものは出典を明記、出典がないのは筆者による注記、収蔵先：北資＝北海道大学付属図書館北方資料室、北博＝北海道立北方民族博物館、北図＝北海道立図書館、函博＝市立函館博物館、知博＝斜里町立知床博物館、余図＝余市町図書館「市川文庫」、稚図＝稚内市立図書館、原題：組写真または絵はがきの原題とスタンプ番号（写真のリストに添付）

No.	区分	初出年代	撮影場所	説明	収蔵先
樺太アイヌ					
1	U	今井1930	東多来加（今井1930）	挂甲の所有者・東万吉（左より2番目）の家族（末永・伊東1979）；「挂甲」は旧樺太庁博物館及び東北大学所蔵のもの	知博
2	S, B	今井1930	東多来加（西鶴1942）		北資
ウイльта					
3	U	今井1930	多来加湾北岸（今井1930）		知博
4	U	不明	不明		知博
5	U	不明	不明	調理しているのはアメマス	知博
6	U, B, P	金田一1930	幌内川Xagja（萩屋）（池上1982）	右から4番目は Wasilai（ワシライ）（池上1982）	知博、北資、北図
7	U	今井1930			知博
8	U	敷香町役場1931	不明	双子の偶像だが、下向きの熊の頭部にも見える	知博
9	U	不明	不明		知博
10	U, B	敷香町役場1931	不明	オロッコの天葬（山本1943）	知博
11	U, P	不明	不明		知博、函博
12	U	敷香町役場1931	不明		知博
13	S, R	澗潟1928?	不明	酋長マツペイの甥（澗潟1928?）アレキサンドルの娘バタラと初生子（澗潟1930）	北資
14	S	澗潟1930	オタスの森近く（敷香町役場1931）	名は夏子。年は12歳（昭和3年）（澗潟1930）	北資
15	S	敷香土人事務所1935	留久志地方（大野1935）		稚図
16	P	今井1930	不明		北資、知博、稚図
17	P	不明	不明		知博、北資
18	P	世良1934	オタス		知博、北資、北図
19	P	不明	不明		知博、稚図
20	B	山本1943	不明	川畔で調理するオロッコ（山本1943）	不明
21	B	敷香町役場1931	不明	冬の家骨組（山本1943）	不明
22	B	山本1943	不明	冬の丸小屋（山本1943）	不明
23	R	今井1930	不明	オロッコの嬰兒子（今井1930）	個人蔵
ニブフ					
24	U, B, P	糸乗1927	オタス?	ユウチリッカ（ギリヤーク）（山本1943）	知博、北図

No.	区分	初出年代	撮影場所	説 明	収蔵先
25	U, B	糸乗1927	オタス?	No24と同一場所、ギリヤーク女の正装(山本1943)	知博、稚図
26	U	今井1930	不明		知博
27	U	不明	不明		知博
28	U	不明	幌内川?	ムシロはストックで支えている	知博、北資
29	U	敷香土人事務所1935	不明	銃脚には文様あり、アザラシ皮製長靴を着用	知博
30	S	大野1935	オタス	ギリヤークの定着聚落(大野1935)	稚図
31	R	不明	オタス		個人蔵
32	R	不明	26と同一場所?		個人蔵
ウイルタまたはニブフ					
33	U	敷香土人事務所1935	不明		知博
34	U	澗潟1930	幌内川(澗潟1930)	8月10日敷香祭礼日前後の丸木舟レース(澗潟1930)	知博
35	U	不明	幌内川?		知博
36	U, B	不明	不明		知博、市川
37	S	不明	幌内川		稚図
38	S	アルバム1932	不明		北資
39	S	敷香土人事務所1935	オタス(敷香教育所)	ウイルタとニブフの児童	余図
40	S	樺太庁敷香支庁1938	オタス教育所前(玲一氏)	シャーマン踊(樺太庁敷香支庁1938)	余図
41	P	不明	幌内川		知博、稚図、北図
42	P	敷香土人事務所1935	不明		知博、稚図、北図
43	P	不明	不明		北資
44	P	不明	不明		知博
その他の先住民族					
45	U	地理体系1930	幌内川	山丹人を父親に持つオロツコ(地理体系1930)	知博、北資 余図、稚図
46	U	糸乗1927	不明	ウイノクロフ(奥)、妻(手前) 娘ワルワラ(左)(玲一氏)	知博
47	U	不明	不明		知博
48	S	敷香土人事務所1935	不明	キーリンの家族(敷香土人事務所1935)	北資、稚図
トナカイ					
49	U	澗潟1930	振戸山麓	知博	
50	U	不明	不明		知博
51	U, S, P	敷香土人事務所1935	幌内川、後方は佐知(金氏)	敷香町より国境に近い森林帯の官行斫伐地へ食糧物資を輸送する(大野1935)	知博、稚図、北資 北図
52	U	地理体系1930	幌内川付近(地理体系1930)	人物はウイルタか明かでない(池上1982)	知博
53	S	今井1930	敷香川(今井1930)	氷上に行く馴鹿の列(今井1930)	北資
54	S, P	アルバム1932	幌内川	見せ物としても行われた幌内川渡渉(玲一氏)	北資、稚図、知博
55	S	アルバム1932	幌内川		北資

No.	区分	初出年代	撮影場所	説明	収蔵先
56	S	今井1930	不明	雪道を帰り行く馴鹿（今井1930）	北資
57	P	不明	不明		知博、稚図、北図
産業・敷香市街					
58	U	徳田1930	幌内川西岸ダレイ三角点から北方古屯の山（徳田1930） ダリー付近の林相（市川文庫）		知博
59	U, P	不明	幌内川中敷香官行アバ（市川文庫）		知博
60	P, S	不明	気屯付近（市川文庫）		北資、知博、北図
61	P	不明	不明		知博、北資、北図
62	P	不明	不明		稚図、知博
63	P	地理体系1930	敷香幌内川河口沖（地理体系1930）		北資、北図
64	P	不明	不明		知博、稚図、北資
65	P	不明	敷香市街		稚図
66	P	不明	敷香市街		北資
海豹島					
67	U, P	不明	海豹島		知博、稚図、北博、北図
68	S	不明	海豹島	海豹島オットセイハレム	北博
69	S	徳田1930	海豹島	海豹島オットセイハレム	北資、北博、稚図
70	S	不明	海豹島	海豹島オットセイハレム	稚図、北博、北図
71	S	不明	海豹島？	ウミガラスの卵	北博
72	P	不明	海豹島		知博、北資
73	P	不明	海豹島		知博、稚図、北図
風景・その他					
74	U	不明	不明	ビール瓶のラベルはSAPPORO BEER	知博
75	U	不明	不明		知博
76	U, P	今井1930	上敷香（今井1930）	昭和4年（1929）6月上敷香の山火事（今井1930）；昭和4年6月2日（市川文庫）	知博、北資、北図
77	U	敷香町役場1931	幌内川；佐知	鯨はシロイルカと思われる	知博
78	U	今井1930	第一天測点		知博、北図
79	U	中村1930	第三天測点（中村1930）		知博
80	P	不明	国境標点第一号		知博
81	P	不明	半田沢、国境標点第三号		知博
推定（下線を引いた番号は、追加して作品と確認されたもの）					
樺太アイヌ					
101	A	西鶴1942	豊原？	昭和9年・樺太庁博物館主事（当時）菅原繁蔵氏が館蔵の挂甲をアイヌ人に着用させた武装（末永・伊東1979）	余図
102	A	不明	豊原？	102と同一	余図
103	A	世良1937	不明	2の女性のアザラシ皮服を着用？	北博

No.	区分	初出年代	撮影場所	説 明	収蔵先
ウイルタ					
104	A	不明	オタス?	オロツコの少女ナチュ、1928生まれ、 母はパトラ（敷香中・高女同窓会1989）	余図
105	A	糸乗1927	不明	オロチョンの婦人（糸乗1927）	余図
106	A	不明	不明	105と同一場所	余図
107	A	今井1930	不明	オロツコの少女2人（今井1930）	なし
108	A	澗潟1928/3/3	留久志地方（大野1935）		余図、北博
109	A	敷香土人事務所1935	オタス?	母のシャーマンの服を着た長男（澗潟1981）	函博
110	A	不明	オタス?	29と同一人物	函博、余図
ニブフ					
111	A	今井1930	不明	ギリヤークの女たち（今井1930）	余図
112	A	今井1930	不明	ギリヤークの女（今井1930）	余図
113	A	今井1930	不明	ギリヤークの天幕（今井1930）	余図
114	R	不明	オタス（玲一氏）	1927-28頃のニブヒ族の葬式（玲一氏）	個人蔵
ウイルタまたはニブフ					
115	A	金田一1930	不明		余図
116	A	今井1930	不明	43と同一場面	余図
117	A	不明	オタス		余図
海豹島					
118	A	地理大系1930	海豹島	オットセイハレム	余図
産業・敷香市街					
119	A	不明	不明	ハジによる運材（市川文庫）	余図
120	A	不明	不明	官行トラクタ集材（市川文庫）	函館、余図
121	A	不明	上敷香（玲一氏）	中敷香選材（市川文庫）	余図
122	A	今井1930	保意（今井1930）	保意（保恵?）付近の焼く林（今井1930） ダリー付近の林相（市川文庫）	余図
123	A	敷香時報社1933	不明	林木伐採（敷香時報社1933）	余図
124	A	不明	不明	トラクソンによる運材（官行）（市川文庫）	余図
125	A	大野1935	敷香港	木材積取作業（大野1935）	余図
126	A	敷香町役場1931	22号漁場	22号漁場のマス漁（北海道敷香会1997）	余図
127	P	不明	東樺漁業株式会社	鱒陸上ケノ景（原題）	北図
風景・その他					
128	P	世良1937	幌内川?	樺太十勝の中幌内川の夕照（原題）	北図
129	A	不明	オタス?	右前で座っているのが半澤中（玲一氏）	個人蔵
作品と確認されたものの追加分					
追加1	P	不明	敷香川	敷香川木材上場入（原題）	北図
追加2	P	不明	敷香市街	飛行機上ヨリ見タル敷香町全景（原題）	北図
追加3	P	不明	敷香市街	敷香町（一）（原題）	北図
追加4	P	不明	敷香市街	敷香町（二）（原題）	北図
追加5	P	不明	幌内川	幌内川の精『オロツコ』の少女（原題）	北図

半澤の作品として確認された写真

樺太アイヌ

1

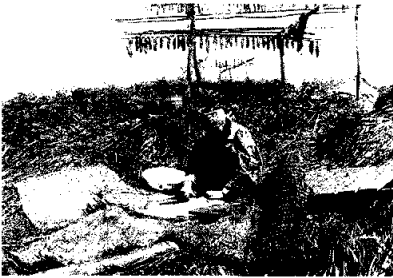
No.7 多来加に住む
樺太アイヌ



ウイルタ
3



5



No.13 オロツコの食料仕度

7



No.15 オロツコ冬の天幕生活

2



79

北海道大学付属図書館北方資料室

4

No.9 天幕内のオロ
ツコ土人



6



No.14 オロツコの家族と夏の家；オロツコ族の一家と夏の家着の身着のままで一ツ屋に幾組かの家族が仲よく起居してゐる

8

No.16 オロツコの
神様



9

No.18 オロツコの墓



11

No.22 オロツコの哺育



13

74



余市町図書館「市川文庫」

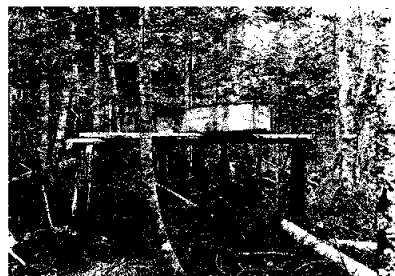
15

99



稚内市立図書館

10



No.21 天葬

12



No.38 オロツコ土人の物置

14

75



余市町図書館「市川文庫」

16

オロツコ族の女何れも
マダムモダンな服装彼
女等は決して二重生活
はしない新調した着物
はボロボロになる迄着
占すのが習慣夜も亦其
假寝につ；63



17



オロツコ人の青年 履けるストーと称し薄い板の裏にアザラシの皮を張つたもの山野の跋涉には軽快無比

18



オタスの森オロツコ部落の夏の家松の皮を剥いで作られたもの然し今は夏冬共に住み半永久的なものとなつてゐる

19

一枚の天幕と一枚の衣服が彼女等の全財産である 首かざり耳輪そして銀の指輪彼女オロツコも恋愛を知る頃である

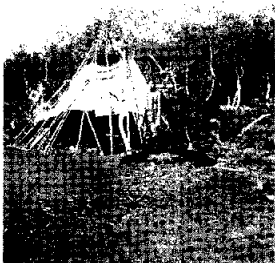


20



余市町図書館「市川文庫」

21



【鴉呼教斎】より

22



【凍土第28輯】より

23



余市町図書館「市川文庫」

ニブフ
24

No.11 ギリヤーク
男主人



25

No.12 ギリヤーク
婦人の正装



26



No.17 ギリヤークの墓

27

No.19 ギリヤーク
火葬の跡



28



No.23 土人の水上魚釣；24

29



30

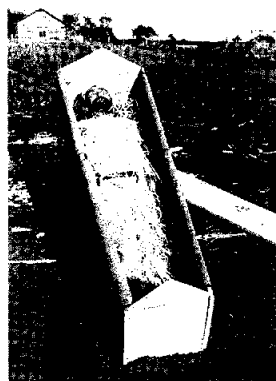


稚内市立図書館

No.24 土人の狩猟

16

31



余市町図書館「市川文庫」

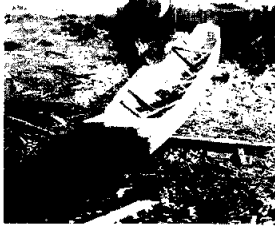
32



余市町図書館「市川文庫」

ウイルタ
または
ニブフ
33

No.25 土人の丸木
舟造り



34



No.26 丸木船にて競う土人

35



No.27 犬橇

36



No.37 土人手製の玩具；37

37



稚内市立図書館

27

38



北海道大学付属図書館北方資料室

39



余市町図書館「市川文庫」

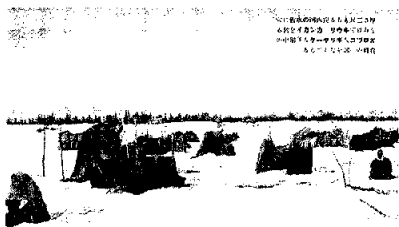
40



余市町図書館「市川文庫」

13

41



余市町図書館「市川文庫」

厚さ二尺もある幌内河の水盤に穴をあけてキウリ カンカイを釣るオロツコ人ギリヤーク人冬期中の食料の一部をなしてゐる

43



土人 河に漁り野に求め転々として餌獲を追う彼等にはツンドラ茵這松屋根が普通である天幕は一定期間の住居であり木皮張りは半永久的のそれである

その他の 先住民族

45

No.5 サンダー人；

5



北海道大学付属図書館北方資料室

47

No.34 ストーの上
の土人



42



オロツコ族の山狩姿 小刀は腰に 鉄砲は皮袋に 足拵へは特に丈夫なトナカイの皮靴こうして彼等は山野を馳駆する

44



軽快十数頭の犬を連結し雪煙をあげて一日よく三十里の道を馳駆する犬橇倅太には今尚至宝的な存在である

46

No.6 ヤクーツ族



48



トナカイ
49



No.28 馴鹿の牧場；振山麓にゐるウキノクロフ氏の馴鹿牧場 人跡遠き原始の集落林人と馴鹿は一体をなして遠く千古の夢を結ぶ

50



No.29 食を求めて散る馴鹿

51



No.30 馴鹿の物資輸送；奥地の造材に要する物資を運搬すべく凍結した幌内河上に集った馴鹿棧；30

52



No.31 夏季馴鹿にて旅行

53



北海道大学付属図書館北方資料室

54



62；敷香のみがもつ唯一の名物数百頭の馴鹿群が幌内の流れを泳ぎ渉る奇観

47

55



北海道大学付属図書館北方資料室

56

98



北海道大学付属図書館北方資料室

90

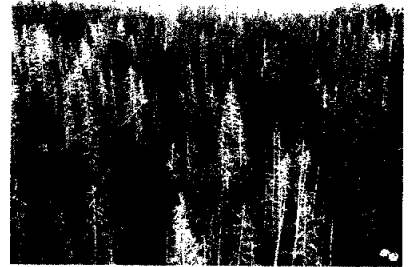
57

冬の月、雪の原に、羊の群れが、
静かに歩いている。羊の群れの
先には、羊飼いの杖が、静かに
立っている。



冬の月、雪の原に、羊の群れが、
静かに歩いている。羊の群れの
先には、羊飼いの杖が、静かに
立っている。

産業・
敷市街
58



No.3 樹海

59



No.4 幌内川の木材流送

60

伐開せられた林間歩道
両側に亭々と天空に聳
ゆトドエゾ松の密林、樺
太の持つ宝庫である；

61

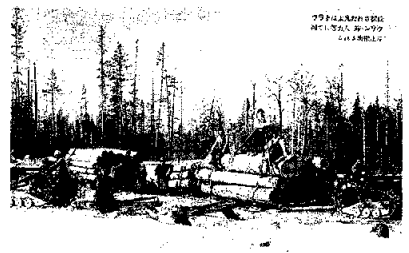


61



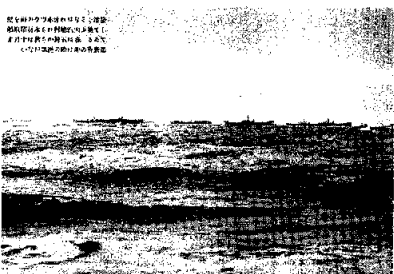
年産二百萬石の松丸太も四ツと称する樺に積まれ、こうして三
本四本と搬ばれる犬を利用してゐるなどは樺太式である

62



伐採された丸太はトラック、ソノ馬、人力等にて河岸迄搬出
される

63



北海道大学付風図書館北方資料室

築港こそなければオホツクの海を頼りて並ぶ大汽船、何れも木材
積取船である。春は五月から秋は十月、未迄敷香の沖は船の絶
間がない。

64



樺太の冬の漁水盤を破つて投網した氷下漁網にのつたカンカ
イとキウリ

65



稚内市立図書館

空から見た敷香町の一部

66



北海道大学付属図書館北方資料室

国際都市たらんとする新興敷香町の一部 新区画東一条通りを望む

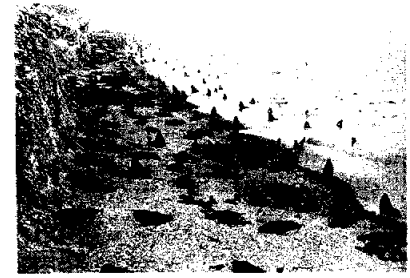
海豹島
67



北海道立北方民族博物館

No.32 海豹島ロツベン鳥の大群集；32

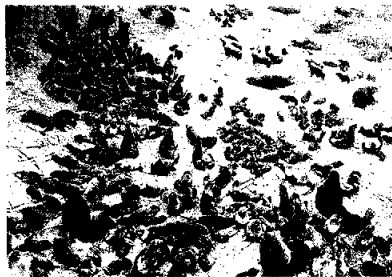
68



北海道立北方民族博物館

33

69



北海道立北方民族博物館

55

70



北海道立北方民族博物館

66

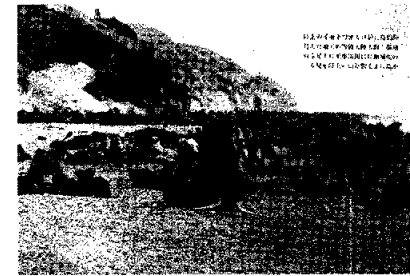
71



北海道立北方民族博物館

無番

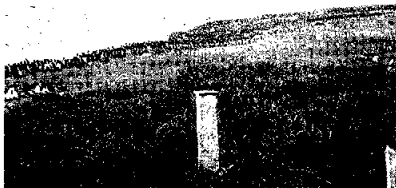
72



海豹島に於けるオツトセイの上陸地帯 海も陸も彼等の天地だ七月の生殖期には周囲半里にも足らぬ小島によく数万頭の上陸を見る

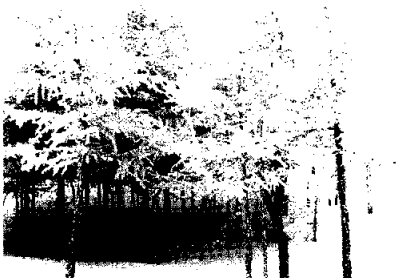
73

冬鳥、ロウベツのうもれ谷の山頂
おれやん、おれは山頂の山頂
おれは山頂の山頂、おれは山頂
おれは山頂の山頂、おれは山頂
おれは山頂の山頂、おれは山頂



海豹島に群棲するロツベン鳥（ウミガラス）ペンギン鳥の如く人を恐れず直立して愛嬌を振まく其数百数十萬羽オツトセイと共に海豹島の奇観

75



No.2 気温の激変による雪花

77



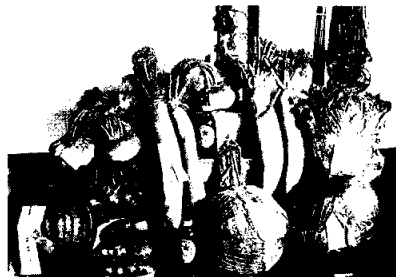
No.36 幌内川を上る白鯨

79

No.40 国境露領側



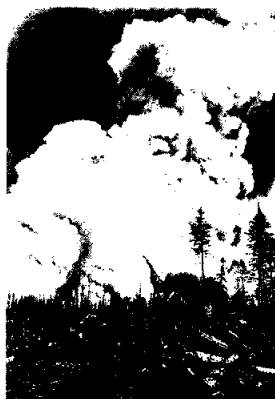
風景・
その他
74



No.1 奥地に産する野菜類

76

No.35 数日焼け続く山火；
百万の富も一朝にして灰に
化し此世に山の地獄と言は
れる樺太の大山火全山火と
なり風を呼んで紅蓮の焰は
天を焦す其凄状言語に絶す
るものがある；35



78



No.39 北緯五十度国境標

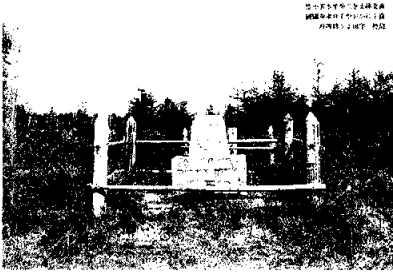
80



国境標点第一号（東海岸遠内海岸より約二百五十米の点）より西方を望む中三十間に亘る北緯五十度の伐開線が見える

追加1	追加2
追加3	追加4

81



南北樺太を二分する五十度線上にかがやく日本帝国国境標
半田より約四軒

推定された写真 ※ただし番号に下線を引いた写真は、追加して作品と確認されたもの

樺太アイヌ
101



余市町図書館「市川文庫」

102



余市町図書館「市川文庫」

103



『樺太写真帳』より

ウイルタ
104



余市町図書館「市川文庫」

105



余市町図書館「市川文庫」

106



余市町図書館「市川文庫」

107

太 樺



【日本風俗地理体系14北海道・樺太編】より

108



市立函館博物館

109



市立函館博物館

110



余市町図書館「市川文庫」

ニブフ
111



余市町図書館「市川文庫」

112



余市町図書館「市川文庫」

113



余市町図書館「市川文庫」

114



余市町図書館「市川文庫」

ウイルタ
または
ニブフ
115



余市町図書館「市川文庫」

116



余市町図書館「市川文庫」

117



『日本地理体系10北海道・樺太編』より

海豹島
118



『日本地理体系10北海道・樺太編』より

産業・
敷市街
119



余市町図書館「市川文庫」

120



余市町図書館「市川文庫」

121



余市町図書館「市川文庫」

122



余市町図書館「市川文庫」

123



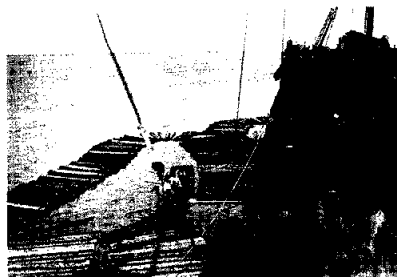
余市町図書館「市川文庫」

124



余市町図書館「市川文庫」

125



余市町図書館「市川文庫」

126



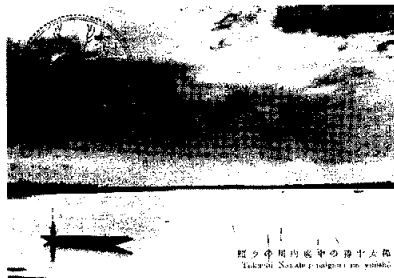
『鳴野波谷』より

風景・
その他
127



北海道立図書館

128



北海道立図書館

129



個人蔵

追加5



北海道立図書館